

最勝講、佛名等日、高盛精進各四種、内膳司所進、近年添和布、居交之、刻限渡御膳宿、於御殿供之、各居平藏人仰、云、高盛トクヤ云々、番衆答申、マイルト云々、番衆傳職事、六位或直、御臺盤采女先昇之、藏人奏云、ヲモノ、別音日別二ケ度也、近年重供之、若御方違以下經宿行幸之時、朝御膳於内裏供之、夕御膳於儲御所供之、又元三者内陪膳、彼時番衆不相從之、

記云 晝御膳

一御盤 四種 銀器 御箸二雙 銀 ヒ二支 同 木箸二雙 二御盤 御飯在蓋銀器 三御盤

平盛五種 銀 窪器一坏 同 四御盤 窪器一坏 銀 平盛一坏 同 御汁物二 同 御酒盞一 同

五御盤 御湯器一口 銀 阿末加津土器 六御盤 高盛七坏盛土器 平盛一坏 同 七御

盤 御汁二坏 土器 燒物二坏 同 已上六七御盤御厨子所辨備之、

〔驢嘶餘〕二梶井殿親王 平生御膳一日兩度也 御器表裏黑漆也、無紋也、江州クルシノ庄ヨリ毎年進納今ハ不納

〔武者物語〕下古き侍の物語にいはいく

北條氏康公の御まへにて、御嫡子氏政公、御食の御相伴をなさる、時氏康公御覽ありて、御なみだをながし給ふ様は、北條の家は、われ一だいに、おわりぬるとの仰なり、氏政公は、申に及ばず、家老衆までことごとく興さめがほにならる、其後氏康公のたまふは、たゞ今氏政が食物もちゆるをみたるに、一飯に汁を兩度かけて食する也、およそ人間は、たかきも下きも一日に兩度づつの食なれば、是をたんれんせすといふ事なし、一飯に汁をかくるつもりをおぼえずして、たらざるとて、かさねてかくる事不器用なり、略下

〔建久三年皇大神宮年中行事〕九月十一日番文

一同日自朝迄十七日夕、於御稻御倉、母良並織女一人所奉織也、於料系者、正員禰宜所進也、但一禰宜者、以佐八御牧系上分勤進也、又七人禰宜、毎日一人勤仕、伴食物日別ニ三ケ度飯酒也、但當時